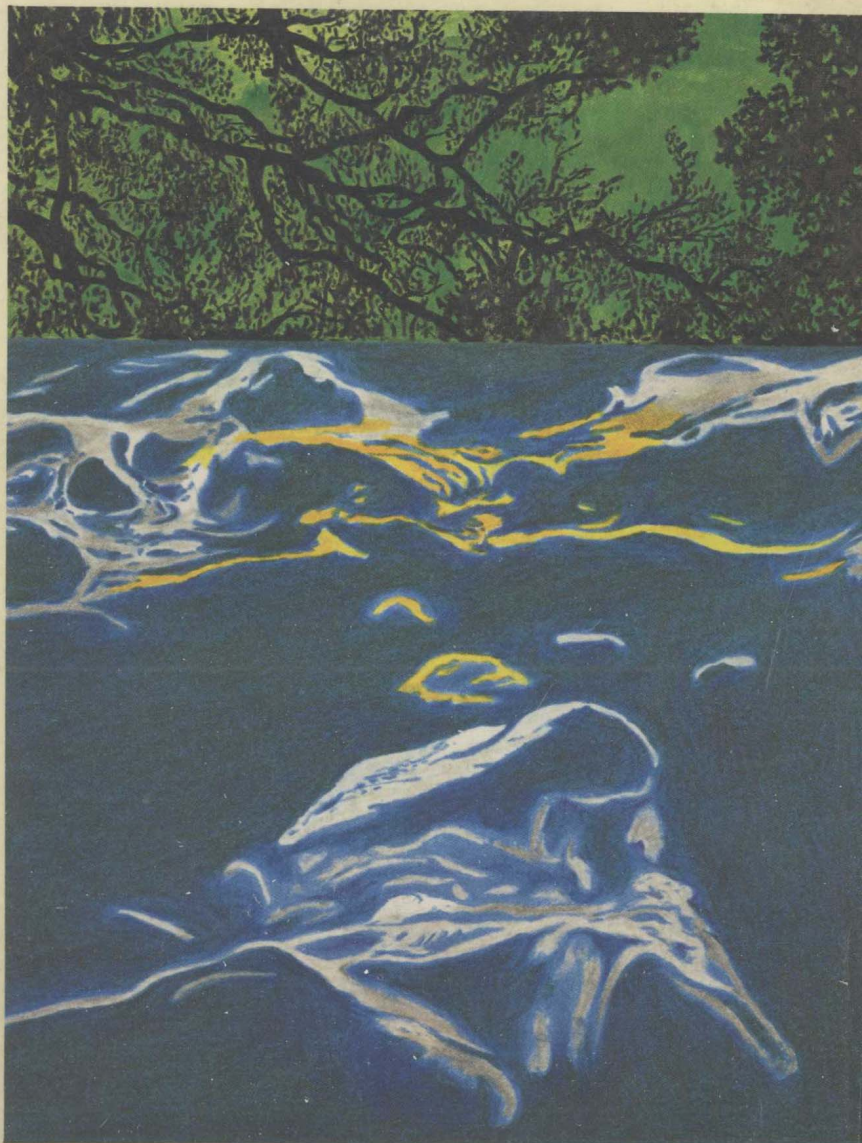


キャンパスの雨

三好京三



キャンパスの雨

三好京三

文藝春秋

キャンパスの雨

昭和五十四年四月二十五日 第一刷

三好京三（みよしきょうざう）

昭和六年岩手県に生れる。

慶応義塾大学文学部国文学科（通信教育）卒。

昭和五十年、「子育て、こっ

こ」で第四十一回文藝界

新人賞受賞後、昭和五十

二年、同作で第七十六回

直木賞受賞。

著書に「子育て、こっこ」

「分校日記」等がある。

定価八百五十円

著者 三好京三

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話（〇三）二六五一一二一

印刷所 共同印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

目次

夏の教室

5

コスモス

53

汗と涙と

107

キャンパスの雨

173

裝釘
坂田政則

キャンパスの雨

夏の教室

一

K大学通信教育部の入学試験は、つごう三度目であつた。二度落ちていたわけではない。最初落ちて、二度目には合格したのだが、単位を一単位もとらずにいる間に年数が過ぎ、留年の手続きもしないまま、退学した形になっているのだ。それで、最初の入学試験から十三年目、三十四歳にしてあらためて受験し直しているのである。

通信教育というのは、まことに持久力が必要とする制度であつた。二十代のはじめごろに入つたときは、何がなし、大学に憧れて入学しただけであつたから、送られてくるテキストのうち、興味のある科目だけを選んでレポートを書いた。しかしそのペースはごく恣意的で、のんびりしたもので、月々送られてくる教材はたちまち山をなした。これを全部読みつくし、レポートを書き、試験を受けるのかと思うとうんざりして、二年目からは全く学習を放棄してしまつた。それでも未練はあるから月謝だけは滞りなく納めた。だから送られる教材も途

切れることがない。

四年間が過ぎたとき、配本は完了したが、レポートは英語と歴史の二科目について四、五通出したただけであった。つくづく、通信教育は根気が必要だと、信吉はわが不甲斐なさを歎いた。

通学課程の大学生を気取りたくて、最後の一年間を、一般大学生と共に大学に通う「通年スクーリング」のコースをめざしたのだが、そもそもそれが失敗であった。通年スクーリングに通うためには、それ以前に、通信によるほとんどの単位を取得し尽くしていなければならぬ。学友と会うという刺激のない状態の中で、信吉のように学業に精励したことのない者にできるわざではなかった。

一単位もとらずに終わった上、信吉はさらにある罪悪感をも背負うことになった。通信教育を受け始めてから四年間、毎年「勤労学生控除」という名目で、五千円ずつ税金が年末に払い戻されていたのだ。月々の手取りが五千円にも満たない高校卒の小学校助教諭にとつて、その還付金は大きかった。しめて二万円である。

どうもその金を、国から詐取してしまったような気がしている。還付金は、国の、勤労学生に対する恩恵である。働きながら学問をする者への愛情なのだ。しかし、信吉はほとんど勉強をしないでしまった。まさしく詐欺である。

それで、十三年経って、再び通信教育を受けようと思ったとき、教員の上級免許状を取得したい、大学の学問にふれてみたいという希望のほかに、国に対する贖罪意識のようなものもあった。

こんどこそは卒業したい。そう思っている。前には通年スクーリングをねらって失敗したので、このたびは毎年の夏季スクーリングに出席することにした。ことしはその第一回目である。

スクーリングが始まる直前に入学試験があった。一般の入学試験とは違って、卒業するまでに受かればいいという通信制独特の気楽な試験ではあったが、ともかくこれに合格しないことには卒業資格が生まれないのだ。

東京の夏は暑い。分校のある村のようなさわやかさを底に秘めた暑さと違い、アスファルト道路やコンクリートの建物やひしめく人間たちによってふつふつと合成されたような、よどんだ暑さである。からだだけでなく、頭までがまいてしまいうである。

受験生は、おそらく三千人を越えている。同期の者だけでなく、スクーリングに参加し、まだ入学試験に合格していない者がほとんど受けるのであるから、龐大な数になるのだ。数教室に分散して問題にとりくんでいる受験生は、思いがけず若者が多かった。十三年前はこうではなかった。教員の免許制度が改正されて間もないころであったから、中年壮年の教師

が大部分であった。一昔の間に受験生の層が全く変わっている。その上、文学部は女性が多かった。男性はほとんど三分の一か四分の一である。下心あって文学部をえらんだのではないかと疑われそんな気がするほど、女性ばかりが目についた。

英語と国語は無事に済んだ。あとは社会科だけである。日本史を受けようと思っている。十三年前に入學試験に一度落ちたのは、実は数学のためであった。文学部でありながら、何のために数学の試験を受けなければならないのかと、甚しく不満であったが、制度がそうなっている以上、文句を言ってもはじまらない。対角線の長さを求める問題を出され、信吉は丸一時間、答案用紙をあちこち折ってみては首をかしげていた。結局しわくちゃな白紙を提出したが、折紙細工のテストではないからもちろん不合格である。

今度は数学がなくなっている。その分、楽だとは言えるが、受験の手引書を見ると、受けようとする日本史は細かい問題が出そうであった。昨夜は水道関係の工務店をやっている叔父のところに泊り、一応手引書で今までに出た問題をあたってみたが、それが今度も出るという保証はない。暗記は昔から苦手である。年号で覚えているのは鎌倉幕府が成立した年だけだ。十三年前にレポートを書いたとき、奇妙にそれだけを覚えたのだ。

問題用紙を配布されるとき、信吉は昨夜調べてみた問題もすべて忘れていたような気がした。せめて鎌倉幕府だけは出てほしい。

予想どおり、日本史は細かな問題が十問並べられていた。一瞥して信吉は絶望した。書ける問題はどう見ても三問しかないのである。「本地垂迹説」「陸奥話記」「五山文学」の三つである。あとは聞いたことさえない。

一応三項について書き始めたが、書きながら気が重くて仕方がなかった。それぞれを完璧に書いたところで、三十点にしかないのは目に見えている。落第がはっきりしているのに、落第用の答案をせっせと書いている。これは無意味というものだ。

十分の七が空白になっている答案を眺め、信吉は慄然とした。いったい、「陸奥話記」など、自分が前九年の役の古戦場のある村の分校で教師をしているからこそ覚えていたので、当今の高校生は果たして習っているのだろうか。こんな細かいことを暗記しなければならぬ歴史などというものは、ほんとうに学問なのか。

昨夜勉強のあと、酒を飲みながら言った叔父のことばがよみがえってくる。

「信吉さんなら大丈夫さ。何しろ小学校の先生なんだから」

酒の好きな叔父である。信吉と一緒に飲みたくてたまらないのだ。突如盃を抛って再び勉強に立たれたりしてはたのしみが消える。

——先生のくせに俺は落ちた——

ひまなので、信吉は他の問題用紙をめくってみた。社会科の問題は、政治、経済、西洋史、

東洋史等、数枚あった。選択は申告制ではないから、どれを書いてもいいのである。どの科目も信吉の知識とは無縁のものばかりであったが、西洋史の問題を見て、おや、と思った。

「英国の海外発展について」

というのである。それ一つしかない。この問題について延々論文をものせよ、ということらしい。日本史と対照的に、大きな問題一つというところがまことに好ましかった。よし、これを書いてみよう、と思った。どうせ、日本史は落ちてゐる。西洋史に乗りかえて落ちたところでもともとである。論文なら、「古今未曾有の壮挙」とか「不屈なヴァイキングスピリット」などということばを並べればどうにかなるかも知れないから、細かい問題の日本史よりは脈があるというものだ。

信吉は、日本史を選択したと誤解されないように、三問についてこたえた部分をすべて丹念に消した。そして、西洋史の答案用紙にあらためて自分の登録番号と名前を書いた。

「英国の海外発展には、新しい市場開拓の意味がこめられている……」

注意深く信吉は書き始めた。市場開拓のためである、と断定してはならない。もし、ためなかつたらたいへんなのだ。表現は幅広い意味を包含する必要がある。

「英国の産業革命と前後して、航海術も……」

年代に触れることも禁物であった。何しろ、十六世紀と十七世紀とでは百年も違うのであ

る。したり顔に何世紀とあやまった年代を書いて、いらざる輕蔑を買うことはない。それよりも、年代など、自明のことではないか、という鷹揚な調子で通してしまった方がよい。

海外發展は、しかし、産業革命の前であつたか後であつたのか、どうも分明でなかつた。船でどんどんよそへ出て行くのであるから、おそらく機械工業が發達したであらうとは考えられるが、一方、海賊はずつと昔からいたようだ、とも思う。ここはやつぱりぼかした方が得策らしいと、革命と前後して、にした。

年代と事實の双方を曖昧に記述しながら一枚のザラ紙を埋めるのは、芯の疲れる作業であつた。なるべく大きな文字を書き、やつと答案用紙半分ほどのところまでこぎつけると、もう書くべき内容はなくなつてしまつてゐる。

仕方がないので、「この發展によつて世界にもたらされたものは何であつたろうか」と自ら設問した。わからない。しだいにいらいらしてくる。山の分校の宿直室で、何の理由も原因もなく不機嫌になり、妻に難題を吹きかけているときのような気分になつた。自分に難題を吹きかけているのである。

「それは植民地の原住民にとつては、限らない圧政の歴史の始まりを告げる弔鐘であつたかも知れない。しかしその弔鐘は、英国民にとつては近代資本主義の幕明けを意味する曉鐘たり得たかに思われた……」

叔父の家は、国電飯田橋駅の近くにあった。

「どうです、うまくやったでしょう」

「ええ、まあ……」

信吉は、注がれたビールを飲みながら、うまくごまかしたでしょう、と言われているような気がした。

二

入学試験の翌日から、御茶ノ水駅と水道橋駅の間、ある雑誌社の経営している会館に宿泊した。四階の三十畳ほどの部屋に、十二人が泊るのである。主に東北の者たちであったが、三重県と長崎県の教師もわりあてられて入ってきた。

床が変わると眠れないたちであった。その上、夕食後、ひとしきり雑談が終わると、大部分の者が勉強を始め、夜中の十二時頃まで起きているのである。雑魚寝の枕元に電気スタンドがつけられているから、眼をつむってもまぶしく感じられてなかなか寝つかれない。そこちで間断なくページをめくる音がする。それも耳につく。いっそのこと、自分も起きて勉強すればいいのだが、氣力がない。汗っかきの信吉はほとんど濡れ鼠になって大学から帰っ